

置き換えられた攻撃の抑制要因としての特性罪悪感の検討

大許 佐和

いじめ、虐待、DV、パワー・ハラスメントなど、人が人を不当に支配し、傷つける行動は社会の様々な場面で問題になっており、日常の些細な場面においても、私たちは人を傷つけるような行動を取ってしまう。このような人間の攻撃行動について、その要因やメカニズムを研究し、理解することや適切な対策を講ずることが求められる。本研究では、攻撃行動の中でも、家庭内暴力やいじめなどとも関連の深い置き換えられた攻撃(displaced aggression)を取り上げた。本研究の目的は、置き換えられた攻撃について、特性罪悪感との関連と、罪悪感と関連の深い共感性の向上及びそれに伴う特性罪悪感の向上による攻撃の置き換え傾向への影響を検討することであった。そのため、次の3つの仮説—仮説1:特性罪悪感が高い人は、特性罪悪感が低い人よりも攻撃の置き換え傾向が低い 仮説 2-a:共感性を向上させることで特性罪悪感は向上する 仮説 2-b:共感性を向上させることで特性罪悪感が向上し、攻撃の置き換え傾向が低くなる—を立て、実験を行った。

使用する特性罪悪感及び共感性の項目を選定するための予備調査を行った後に、仮説を検証するための本実験を行った。プレテストで特性罪悪感、共感性を測定し、特性罪悪感の値によって高低群に割り当て、特性罪悪感低群の実験参加者はさらに、共感性を向上させるトレーニングに取り組む実験群と共感性と関係のない単純なトレーニングに取り組む統制群に割り当てた。その後、実験参加時の感情状態を尋ねる質問紙調査→トレーニング→特性罪悪感、共感性、実験者への謝礼の金額(置き換えられた攻撃)、実験者の印象を尋ねるポストテストの流れで、群ごとに実験を実施した。

仮説 1 の検討のために相関分析を行った結果、置き換えられた攻撃の抑制要因としての特性罪悪感の影響は確認されなかった。よって、仮説 1 は支持されなかった。また、仮説 2 の検討のために回帰分析を行った結果、トレーニングの有無による共感性の向上への影響、共感性の向上による特性罪悪感の向上への影響、特性罪悪感の向上による攻撃の置き換え傾向への影響は確認されなかった。よって、仮説 2 は支持されなかった。探索的分析の結果、実験参加時の感情状態が実験操作や置き換えられた攻撃の測定に影響を与えている可能性が示唆された

仮説 1、仮説 2、探索的分析の検証を通じて、置き換えられた攻撃の抑制要因や、共感性の向上及び罪悪感の向上による攻撃の置き換え傾向への影響、実験参加時の感情状態による置き換えられた攻撃そのものや実験全体に与える影響について、さらなる検証の余地が示された。(社会心理学)